

## 群馬県公共施設のあり方検討委員会 中間報告(H20.10.17)抜粋 【ぐんま昆虫の森】

### 1 現 状

ぐんま昆虫の森は、身近な昆虫との触れ合いを通じて、生き物相互のかかわり合い、生命の大切さ及び自然環境に関する県民の理解を深めることにより、人と自然が共生する社会づくりに寄与するとともに、持続可能な地球環境を次世代（子供たち）へ引き継ぐことに貢献することを目的に、平成17年8月に設置された施設である。

この施設は、自然の中で能動的に昆虫を探し触れ合うことのできる世界にも例のない全く新しい体験型施設である。

ぐんま昆虫の森には、「里山」を復元した約45ha（東京ドームの約10個分）に及ぶフィールドがある。また、メイン施設である本館昆虫観察館には、亜熱帯の沖縄県西表島を再現した生態温室があり、20種類のチョウを一年を通して見ることができる。

さらに、映像、展示、書籍だけでなく、いろいろな体験型プログラム（自然観察体験、里山生活体験、クラフト体験など）も用意しており、楽しみながら昆虫の生態を学習できるよう工夫されている。

なお、年間の入園者は約10万人で、このうち学校等の団体利用は約2万7千人（平成19年度）となっている。

### 2 課 題

- (1) 昆虫の森は管理運営に多額の経費を要する大規模施設であり、現在の厳しい財政状況下において、県立の教育施設として、どこまでの機能を備え、管理運営経費をかけるべきか。
- (2) 利用者を増加（収入の増加を含む。）させるため、どのような取組を行うべきか。

### 3 施設の今後のあり方

- (1) 施設の必要性について

ぐんま昆虫の森の提供するサービスは、県として必ずしもなくてはならないものではないが、開園4年目の新しい施設であり、直ちに廃止すべきとまでは言えない。しかし、運営内容等の徹底した見直しと利用者増加の積極的な努力が強く求められる施設である。そのため、必要性に疑問のある生態温室の存廃、里山（フィールド部分）のあり方、運営経費の見直しや利用者の拡大等について、県として速やかに具体的な検討を行うべきである。

県の施設としては、群馬県の自然やそこに生息する昆虫の生態の展示・観察を主とすることが大切であり、亜熱帯の環境やそこに住むチョウ等の展示の必要性は低いと考えられるので、生態温室については根本的な見直しを行う必要がある。

里山（フィールド部分）は、広大な自然公園であり、昆虫に触れる場だけではなく、里山という自然に触れる場として明確に位置づけ、里山としての利用も拡大すべきであり、その観点から、提供するサービスの内容や施設の名称、入園料のあり方について検討する。

(2) 管理運営方法について

自然豊かな里山を有する教育施設であるが、観光施設としての利用も視野に、利用者の拡大を図るとともに、施設全体としての経費削減について、具体的な検討を行う必要がある。

生態温室の新たな活用方法、映像トンネルなどの既存施設・設備や職員体制の見直しなど、管理運営の効率化について抜本的に検討する。

広く県民を対象とした施設として、利用者の立場から、できる限り利用の制約をなくすなど、利用者の利便性を高める努力を行うとともに、昆虫だけではなく、里山（フィールド部分）の自然を生かし、野外で楽しめる要素を増やす方向での運営を検討する。

広く県民に開かれた施設運営を行っていく必要があり、県民の声を広く反映した運営に努めるとともに、今まで以上に地元桐生市との連携・協力やボランティアとの協働を重視した運営となるよう工夫する必要がある。

県内外へのPRや学校等の団体利用の促進など、新たな利用促進策について検討する。

(3) 管理運営主体について

民間の持つノウハウを積極的に活用することにより、新たな試みも生まれることから、民間事業者の意向を広く聴取するなど、指定管理者制度導入の可能性についても検討する必要がある。

(4) その他

当施設は、当面運営を継続するとしても、その管理運営について、徹底した点検と見直しを求めるものであり、今後行う改善等の取組については、一定の年限を区切って、目標を設定して行い、その取組や結果の検証を行う必要がある。